2月例会報告

【日時・会場】2001 年 2 月 17 日(土)18:30～20:50 駒沢陸上競技場会議室→～23:50 近くのファミレス(で飲んでた)
【参加者】内田正人(Ｂ＆Ｄ)、笹原勉(日揮)、澤井和彦（東京大学)、杉村宏道(専修大学)、田尻美寧貴((株)クラブハウス)、徳田仁(SFN)、豊田幸夫(フットボウズ･フットボール)、中塚義実(筑波大学附属高校)、笛木寛(大学講師)、本多克巳((株)クラブハウス)、宮崎雄司(サッカーマニア編集・発行人)、山戸一純(FUTSALNET)、横田祐介(筑波大学大学院)、四方健太郎(立教大学)
【新規参加者】秋田信也(東邦大学)、梶野政志(日本フットサル連盟理事長／東京都フットサル委員会委員長)、北谷仁治((株)クラブハウス)、木暮知彦(ピープルソフトウェア(株)／FUTSALNET)、五香純典(筑波大学大学院修士課程 2 年･スポーツ社会学研究室)、坂下佳弘(Club-Tokyo)、八河美智子((株)クラブハウス)
注）参加者は、所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

2001 年のフットサル連盟
梶野政志(日本フットサル連盟理事長)

本報告は、当日の梶野氏の発表と秋田氏による補足説明、及び当日のディスカッションをもとに再構成し、参加者のチェックを経て公開するものである。なお、内容については一部『フットサルオフィシャルハンドブック 3』を参考にした。

＜全体構成＞

＜１＞プレゼンテーション
１．番組の前提・背景
２．番組の内容について
３．今後の課題
１）　登録制度はどうなるのか
２）リーグの組織化の見通しはどうか
３）強化システムはどうなるのか
４）普及啓蒙活動はどうなるのか
＜２＞ディスカッション

＜プレゼンテーション概要＞

１．フットサルと協会・連盟－組織の歴史

１）フットサルと協会･連盟の現状

日本サッカー協会(JFA)の委員会としてフットサル委員会があり、その傘下に都道府県サッカー協会フットサル委員会がある。都道府県と JFA の間には地域サッカー協会があり、そこにもフットサル担当者が置かれている。

一方、日本フットサル連盟は、現在のところ都道府県フットサル連盟、地域フットサル連盟との関係が少ない。「日本フットサル連盟」そのものがあって、そこから下は組織されていなかった。2000 年度に日本フットサル連盟の改組再編をして、各地域にフットサル連盟を作ってもらおうという呼びかけをしているところである。現在、北海道、関西、関東の 3 地域で連盟ができている。また、都道府県単位では、兵庫県、長野県、滋賀県、鹿児島県、北海道が連盟として活動している。

２）フットサルの歴史

フットサルの前身とも言える「サロンフットボール」は、1930 年にウルグアイで考案され、手軽な屋内競技として南米全体へ広がっていった。’65～’79 年まで、通算 7 回、南米選手権が開催され、80 年と 84 年にはパンアメリカンカップの名称となった。世界サロンフットボール連盟(FIFUSA)は 1961 年に設立され、1982 年に第 1 回世界サロンフットボール選手権をサンパウロで開催し、’85 年にスペイン、’88 年にオーストラリア、’91 年にイタリアと、3 年毎に世界大会を開催してきた。サロンの大会には日本ミニサッカー連盟が日本代表チームを派遣していた。

世界各地にいろんな「ミニサッカー」があるが、総じて南米では弾まないボールを用いる「サロンフットボール」が、ヨーロッパでは普通のサッカーボールを用いて壁面の撥ね返りを利用する「インドアサッカー」が行われていた。ルールも名称も国によって様々で、フットボール・サラ(スペイン)、ハーレン・フッスバール(ドイツ)、カルチェット(イタリア)、ザール(オランダ)等がある。ヨーロッパでは、オランダの「ザール＝ZALL：部屋」のルールをもとに UEFA がインドアサッカーのルール統一を図り、オランダ、ベルギー、スペイン、イタリアの 4 ヶ国で大会が行われた。

FIFA はこれらミニサッカーのルールを統一しようとして、’88 年に「ファイブアサイド」の名で独自のルールを作り、’89 年に第 1 回の世界大会をオランダで開催した。日本からは、この年の日本リーグを制した本田技研が出場、北澤選手も出場した。第 2 回大会は’92 年に香港で開催されたが、日本は予選で敗退した。

「FIFA と FIFUSA の 2 極路線がほぼ統一されたのが、’92 年の香港大会です。この大会後、ルールの問題点を改正した上で、’94 年より『FUTSAL』と競技名称を改めて、改正ルールを発行しました。日本もこの決定を受けて、今後「フットサル」をミニサッカーの正式名称としていくことになりました」(『フットサルオフィシャルハンドブックⅢ』より)。’96 年にスペインで開催された第 3 回大会以降、この大会は 4 年に一度行われることとなり、2000 年秋、グアテマラで第 4 回大会が行われ、スペインがブラジ

ルを下して初優勝した。

補足(秋田氏)

FIFA 会長であったアベランジェは、もともとサロンフットボールの南米の会長であったが、その後会長となったジャノアリオとは犬猿の仲。アベランジェが世界各地のミニサッカー事情を調査させたのは、ブラジルでサロンフットボールが盛んに行われ、それが大きな産業となっているのを知っていたからである。世界各地にある様々なミニサッカーのルールを統一して FIFA 傘下に収めることにより、サッカー人口の更なる拡大と大きな利益が期待できると考えたのである。

’76 年頃は、どこへ行っても全部ルールが違っていた。サロンフットボールのルールだとブラジルが圧倒的に強かった。ブラジルではこのルールで 50 年も歴史を積んできている。10 年たっても勝てっこないというのがヨーロッパ側の意見であり、新たな統一ルールの考えが出てきた。

FIFA が統一しようとしていた時、「サロンの大会に日本代表としては参加できない」「サロンの大会に行ったらペナルティが与えられる」という話もあり、大会参加を見合わせたこともある。
また、弾まないボールを作れるところは、ブラジルと日本ぐらいしかなかった。

３）日本におけるミニサッカー
日本でのミニサッカーの始まりは、日本に来ていたブラジル人選手たち(セルジオ越後、マリーニョ、ラモスなど)のアドバイスによるものである。’77 年 11 月 12 日、JFA 傘下に日本ミニサッカー連盟が発足した。これ以前に、’73 年には日本リーグ全 8 チームが参加して「第 1 回ミニサッカー選手権大会」が開催され、ヤンマーが優勝、第 2 回は古河電工が優勝した。

また、’76～’80 年は女子の 8 人制大会が行われ、その後の日本女子サッカーリーグ、L リーグへと向かっていく。「そのほか伊勢丹のミニサッカー大会、千葉県千倉町の黒潮サッカーフェスティバル(ビーチサッカーのはしり)などいろいろな大会が登場します。中でも「全国少年総合ミニサッカー大会」(’79～)は、部門制や各地会場持ち回りなど大規模な大会でした」(『フットサルオフィシャルハンドブックⅢ』より)。

ミニサッカー連盟主催により 10 年間行われた「全国少年総合ミニサッカー大会」は、その後 JFA 主催の本格的公式大会に発展した。90、91 とプレ大会を行い、92 年から新たに「全日本少年ミニサッカー大会」が誕生、96 年からは全県から参加するようになった。92 年の優秀選手が小野伸二。沼津のチームで出場して、ずば抜けてうまかった。自分(梶野氏)はこの大会の審判だったのでよく覚えている。

ミニサッカー連盟は、11 人制以外のミニサッカーを全て取り込んでいた。ミニサッカー連盟を引き継いだフットサル連盟がビーチサッカーも管轄するのはこういった経緯からである。ビーチサッカーは今、ビーチバレーのようにオリンピック種目になることを視野に入れて、統一ルールを作ろうとしている。

４）日本におけるフットサル
JFA が本格的な取り組みを開始したのは 94 年からである。94 年 7 月に JFA に「ミニサッカー委員会」が創設、同年 9 月にはフットサル委員会と名称を改め、95 年 4 月には各都道府県協会にフットサル担当者を置くこととなった。やり方はともかく、これによって各都道府県の人たちもフットサルを意識するようになり、全国展開の種がまかれたと言える。96 年 2 月に第 1 種の大会を行ったが、これが全日本フットサル選手権大会である。現在、少年の大会、U-15 の大会、全日本フットサル選手権大会の 3 つが、JFA 主催のフットサル選手権大会である。

日本フットサル連盟主催大会には、今年 16 回目になる「全国選抜フットサル大会」、「キリンフットサルフェスティバル」、女子の「ティファールカップ」などがある。

補足(秋田氏)

「セルジオ越後のサッカー教室」は 77 年、78 年と千葉で行われ、そのシステムが OK だというのでコカコーラがお金を出して「さわやかサッカー教室」がはじまった。これがミニサッカーを全国に広げるのに大いに貢献した。
それ以前は、北海道で柴田先生が 75～76 年頃にマリーニョとともにサロンフットボールを持ち帰り、普及に成功した。今も北海道ではサロンフットボールの連盟が存在し、大会も行われている。

サロンフットボールは体育館で行うのだが、体育館を借りようとする時に「外でできるものをなぜ中でやるのだ」と言われ、室内で行うのは困難な状況にあった。そこで、室内で行うサロンとは別に「ガーデンサッカー」を考案し、セルジオ越後らと広めようとしていた。室内でやるのはサロン、外でやるのはガーデンというように区別して呼んでいた。また、8 人制のミニサッカーをやっているところもあり、これら 3 種のミニサッカーを全部やって競い合う「総合ミニサッカー大会」というものを、三菱養和で 2～3 回、千葉の成田で 1 回行った。
今日、大会そのものはフットサルに集約されてきている。

２．日本フットサル連盟の改組･再編(2000 年度)

各都道府県にフットサル委員会を置いたが、組織として全国展開の体制ができていないのではないか。また、民間施設への対応など、統括団体として有機的・現状のスピードに合う組織づくりをしようということで、2000 年度に日本フットサル連盟を改組･再編した。

これは、フットサル委員会と連盟の役割を分担していこうということから始まった。連盟が普及と強化、そして様々な制度の構築と運用に当たる。委員会は、連盟の活動の監理を行う組織として位置づけることがまずあった。

また、各都道府県に連盟を作ってもらい、日本フットサル連盟の傘下に入り、基盤のある全国組織を作ろうという意図も当初はあったが、こちらの方は各都道府県ごとに事情が異なるため、なかなか一様には進まない。当面 9 地域単位で連盟を組織してもらおうと考えている。

96 年度に「フットサル登録制度」を作る時にも、クラブ登録、個人登録などいろんな意見があった。サッカー協会の組織の壁は厚く、結局チーム単位の登録になったが、大会ごとの登録制度は画期的であった。しかし、単発なので継続性が保てない。組織で加盟する単位が必要であり、新制度には新しい登録制度が検討されている。

３．2001 年度からのメンバーシップの確立と展望

簡単に言えば、「仲間を増やしていこう」というのが最も大きなところである。仲間を増やすには、登録制度をとって、どれくらい仲間がいるかを把握することが必要。JFA の登録制度を活かしながら、日本フットサル連盟に加盟してもらう、チーム単位で登録してもらうことを考えている。

本来はクラブと個人で加盟、加入してもらうべきなのだろうが、制度そのものを全国に理解してもらわなければならない。その際、「チーム」の方が理解が得られやすい。「クラブ」と言っても年齢のいった人たちにはなかなか理解してもらえない。とにかくメンバーシップを確立してから徐々に変えていくことを考えている。

１）登録制度はどうなるのか
連盟にはあらゆるカテゴリーが入るのだが、まずは第 1 種登録からはじめ、2001 年度から新たな加盟登録制度を実施する。サッカー協会の枠の中から出ないようにするには、都道府県サッカー協会を通じて登録してもらうことになる。登録制度はリーグ戦をやっているところが主体となるが、チーム単体でも加盟できる。ただし、その場合はあまりメリットはないかもしれない。

２）リーグの組織化の見通しはどうか
リーグ戦を都道府県単位でやってもらえれば一番良いが、チーム数が少ない都道府県もある。現在リーグ戦をやっているところは更に充実させてもらいたいし、まったく手付かずの地域－北信越、四国、中国－では、できるところが核になってリーグを立ち上げてもらいたい。

関東、関西、北海道で現在地域リーグが立ち上がっている。2001 年度はこれらのチャンピオンを集めてチャンピオンズリーグを開催する。9 地域全部そろった全国リーグにまで持っていければと考える。もちろんトップだけ作ってもいけないので、民間施設などにいる愛好者にどうやって仲間に入っていただけるか、皆さんの意見を頂きたい。

公共施設の開放を働きかけることなど、連盟でなくてはできないことがある。また、情報提供は最重要課

題である。リーグ戦をうまく立ち上げたところの情報など、正しく、良い情報を提供していきたい。12月にリニューアルした連盟のホームページを、今後一層充実させていく。

３）強化システムはどうなるのか
４）普及啓蒙活動はどうなるのか
日本フットサル連盟では技術部を設け、委員会と連盟の両輪で強化に関わる事業を進めている。フットサル委員会の技術担当委員(藤口氏)が代表等の関係のアドバイスをしてもらっている。

連盟では強化指定選手制度の導入などを考えている。強化システムの延長上に、2001年度より「フットサルリーダー」をつくる新制度を始める。これは 1～2泊ぐらいの講習で資格取得できるものを考えている。指導者が各地域に散らばることによって、リーグ戦やフットサル講習会ができて、仲間を増やすことができるだろう。

フットサルリーダーの先には「コーディネーター」の資格制度も考えている。資格を持ったコーディネーターがいるとオフィシャル大会の主催ができるような制度であり、このような制度をつくって、できるだけ沢山の人がフットサルに関わっていけるようにしたい。多くの仲間が増えることは代表強化にもつながるだろう。
まずは「フットサルリーダー」を育てることからはじめる。

補足(秋田氏)

学校･企業のスポーツがどうにもならなくなっている中で、フットサルが核になって、スポーツを続ける受け皿としての「クラブ」を育てることができるのではないか。スポーツにかかるコストは受益者負担だけでは解決できない。企業からお金をもらえるようなことを考えると、クラブのNPO化など、法人化の道を探ることが大切。
フットサルが核になって受け皿になれるかどうかが一番大きいのではないか。

＜ディスカッション＞
●連盟のスタッフと必要性
・連盟のスタッフは、事務局専従が１名いるが、総務担当理事(兵庫県サッカー協会事務局長中桐さん)を含めてあとは全てボランティア。先立つものがなければ人も雇えない。
・データベースの監理等、すでに民間でやっているところにアウトソーシングすることを考えた方が良いのではないか。
・そこに踏み切れないのは、収入がないことが最大の理由。財源確保のためにも登録制度、メンバーシップの確立が必要。このあたりが一番の問題。
・仲間が集まってフェデレーションができるのが本来の姿だが、日本の場合は先に連盟があるような感じを受ける。日本のスポーツ全部がトップダウン方式。ボトムアップで仲間が集まって作ったものでは

ない。
・トップレベルと地方において連盟が必要なのはわかる。地方ではフットサルしているチームが少ないので、ある程度連盟組織がリードしてやっていく必要があるかもしれない。しかし、首都圏において連盟は本当に必要なのか。

●アウトソーシングの可能性
・フットサルネットでは、チーム登録、ランキング、チーム評価のソフトをすでに作っている。これを使って下さいということは言えるが、外から見ていると、そういうことが言えないような雰囲気がある。いろんなリソースは、コンピューターソフトに限らず沢山ある。
・ホームページの書き換えは大変。アウトソーシングできればいいが、だからといってある 1 社を「連盟公認」にしてしまうのもどうか。同業者で話をしてもらい、各社から少しずつ協賛金を出して良いものを作っていく。それこそが連盟そのものではないか。
・民間施設もフットサルに関係する企業も、連盟の中に入ってもらうようなことを考えている。

・東京では民間施設による施設連絡協議会がある。そこで、施設を超えたリーグ戦をやろうということになった。各施設でチームを募集すると、多いところと少ないところが出てきて不公平になるが、それを連盟で一括して受け付けて各施設に割り当てれば、各施設にとってもメリットがある。割り当てられたチームをいかに施設に繋ぎ止めるかは、施設側の努力次第。
・千葉県では連盟のリーグに入ってやっているところが増えているし、チームをどんどん変えながら、固定化しないで動いている。商品化という発想にたって、どんどん外に出している。
・兵庫県のリーグは 230 チームぐらいある。関西では施設交流会もやっている。協会のフットサル委員会主催、連盟主催行事も、うまくアウトソーシングしながら進めている。フットサルは、協会･連盟や民間が柔軟な形で連携を取りながら進んでいける感じがする。

・組織としては、譲れるところと譲れないところ、アウトソーシングできるところとできないところがある。柔軟な対応は、それが本当に良いことであっても、だめということもある。サッカーとたもとを分かつのではなく、理解してもらいながら進めていきたい。協会の理事会でだめと言われればだめ。その人たちに理解してもらえるよう、受け入れられるところで立ち上げて、中身を運用の中で変えていくことを考えている。

●オフィシャルと民間の競争と共存
・最初から全部フットサル連盟の傘下にというのではなく、できるだけ自由度を与えた方がおもしろいだろう。連盟が売れる商品を作れば売れる
・ニーズが多様化し、変化のスピードも激しい。それに対応してサービスを提供し、市場の中でもまれている民間と、専従職員ひとりでやっている連盟では、勝負したら連盟が負けるだろう。
・競技団体のあり方とも関わってくるが、オフィシャルが頑張れば頑張るほど民間の勢いを失わせてしまうこともあるのではないか。例えば、連盟がフットサル情報を全て握ってしまったら、民間サイトの意義が薄れてしまう。また、大会やリーグにしても同様に、整備されればされるほど、民間のゲリラ的な大

会がしんどくなってくるのではないか。長い目で見たらオフィシャルの方が勝つ。それくらいオフィシャルへの憧れ、権威は大きい。平等な勝負ではない。

・今の 20 倍～30 倍の人たちがフットサルを楽しむようになれば、オフィシャルの系列に入るグループと、入りたくないグループに分かれてくると思う。
・どこまでを登録の範囲(メンバー)と想定するのか。オフィシャルな部分、競技志向にとどめるのか、見るのが好きな愛好者も含めて考えるのか。
・する人も見る人も仲間として捉えたい。競技者には登録料を高く設定する、あるいは登録することによって安く観戦できるようにする、または基礎登録料があって、大会に出たくなった時に上乗せするといった方法が考えられる。登録していなくても愛好者は沢山いる。この層をどうするかも課題。

・民間か協会かについては、まだ競争ではない。フットサルが成長していく過渡期である。競争ではなく、一つの船の上に乗っていると考えた方が良い。
・フットサルの盛り上がりは、全体からみるとまだ一部でしかない。ネットを見る術すら知らない人も大勢いる。フットサルの認知についてもまだまだ。これからである。

●財源の確保と用途
・オフィシャルスポンサーを頼りにする方法もあるが、スポンサーの顔色を伺うことになってしまう。できればメンバーシップによって、自前でやっていきたい。しかし、現時点でフットサルのリーグに属しているところが登録料を払ったとして、来年度に予測される収入源は、メンバーシップだけでは 500 万円も行かない。実際のフットサル連盟の予算は、昨年で 750 万円ぐらい。
　日本代表を作る時には、JFA から 2,000 万、3,000 万と出してもらうしかない。JFA の庇護の下で、連盟がかろうじて存在しているというのが今までの状況である。加盟チームの収入だけでやっていこうとしたらその程度にしかならない。大会を開催することによる連盟の財源確保を考えていかなくてはならない。すなわち、メンバーシップと、大会を通じて得られる協賛金で運営していかざるを得ない。

・集めた財源の使い道は大会運営費、特に審判にかかる費用が大きい(審判代は、東京の場合は 1 試合 2 千円)。これを大会参加費だけでやっていくと、チーム参加費は非常に高くなる。全日本選手権東京都予選では、1 チームにつき 3 万 5 千円～4 万円の参加費が必要。
・民間の大会は 1 万円から 1 万 5 千円。いくら何でも高すぎる。
・トップを目指す人は 3 万円出すだろうが、ただサッカーをしたい人は 3 万円は出さない。
・神奈川では、県リーグ加盟チームは必ずフットサル審判を持たなくてはならないとなっている。
・オフィシャル大会なのだから審判は第 3 者から出しなさいという要求がチーム側にもある。

後日談１）
この回のあと、2 月 19 日(月)に、梶野氏と東京都サッカー協会安田会長が、2001 年度からの東京都フットサル連盟発足に関して意見を交わしたところ、時期尚早とのことで見送られました。本来の連盟のあり方に即して「上から」組織するのではなく、まずはリーグ組織を整備し、底辺からトップレベルまでつ

ながる道筋を示した上で、「下から」組織するべきではないかということが見送られた根拠のようです。

後日談２）
3 月 1 日(水)に再度、梶野氏と安田会長が意見を交わしたところでは、現在東京都で行われているフットサル「リーグ」がそのまま「連盟」と判断し、リーグへの登録料(参加費とは別に)を徴収する方向で話は進んでいます。まだまだ予断を許さない状況のようです。

＜中塚の感想･意見＞

私自身は’95 年に東京都フットサル委員会が発足(初代委員長は小野剛氏であった)する際､｢高体連から｣委員に選出され、それ以来フットサルと関わっている。委員である以上、気合いを入れて取り組みたいとは思うが、所詮フットサルに関しては門外漢である。そう思っていた。

しかし今回、日本におけるフットサル、ミニサッカーの歴史を改めて振り返ってみると、ところどころに自分も接点があったのだということに気がついた。最初は中 3 の時。高校入試の直前だったのでたぶん’77 年の 1 月末だったと思うが、大阪のどこかの体育館(もう忘れた)で行われたセルジオ越後のサッカー教室(さわやかサッカー教室になる前だったと思う)に参加したことである。プロ選手の本格的な技にはじめて触れたのが「体育館でのミニサッカー」との出会いでもあった。数ヶ月後(かどうかも忘れたが)、大阪商業大学の体育館で行われた時も張り切って参加した。あの時はサッカーショップ加茂が関わっていたような気がする。

時は経過し、’85 年の春～夏頃。ひょんなことから(たぶん筑波大学の松本光弘氏がどこかから持ってきた話だったろう)千葉県千倉の少年大会の運営を、我々大学院生軍団で担当することになった。今回の話にも出てきた「黒潮サッカーフェスティバル」がそれで、確かに砂浜でのビーチサッカーをウリにしていた。あの時は｢サンドサッカー｣と言っていたように記憶している。

その大会期間中、千倉町内の小学校の体育館で、親睦ミニサッカーをすることになった。相手は、榮隆男氏(現 JFA フットサル委員長)の率いるチーム(十条 FC だったのだろうか?)。こちらは全員、筑波大学蹴球部でバリバリにやっていた連中で、当時も「ジョイフル本田」というチーム名で茨城県を制覇する程の実力者ぞろいである。
少年たちの見守る中での親睦ミニサッカーは、こちらの技を披露しながら軽くいなすかといったノリで始めたのだが、どうもイメージしていたのと様子が違う。パスを逆に回され、気がつくと失点を重ね、終わってみれば完敗であった。あの時やった「ミニサッカー」は、今まで遊びでやっていた体育館のミニサッカーとはどこか違うと感じながら、「何で負けなあかんねん」と、悔しさでいっぱいだったのを覚えている。本格的な「サロンフットボール」、あるいは｢フットサル｣との出会いである。

そんなことを思い出しながら、梶野さんと秋田さんの話をお聞きしていた。だから今こうして関わっているのも、少なからずご縁があるからなのだなあと、妙に納得してしまった。

ところで本題のフットサル連盟だが、やはりどこかに無理を感じたのは私だけではないだろう。フットサルプロジェクト 1 報告書にも書いたし、この日の議論でも出てきたが、「トップダウンではなくボトムアップ」がどこまでできるか、自立した「クラブ」をいかに育てることができるかがポイントである。その意味で、後日談に出てきた最近の動きの方が歓迎である。「協会が連盟になる」というより、実際に動いている「リーグが連盟である」といった方がはるかにわかりやすい。理想は、加盟単位を「クラブ」としてそこから「会費」を集め、大会ごとに「チーム」から「参加費」を徴収するのがよいのだが、実際はどうなるのだろう。

「DUO リーグ」(中塚がチェアマンをしているユースサッカーリーグ)では、2001 年度のシーズンから「DUO クラブ」(高校またはクラブユース)から加盟費を徴収することにした。2000 年度から導入している「DUO リーガー」の個人登録料とあわせて、これで「会費」の部分が整理された。「参加費」についてはすでに初年度から、「チーム」ごとに徴収している。
これらについてはまたの機会に詳しく報告したいが、案外 DUO リーグの試みの中に、フットサル連盟が抱える課題の解決策があるような気がするし、フットサルが各地にリーグを組織しようとする試みの中に、ユースサッカーリーグ組織化のヒントが隠されているように思う。フットサルプロジェクトは今後、「ユースサッカーリーグ推進プロジェクト」(まだ始まっていないが)と連動しながら進めていくのがいいかもしれないと考えた。